

道標ない旅

自分も人も大切に

～思いやり
・チャレンジ
・しなやかな心～



令和2年度 第34号
2021. 2. 19発行
葉山町立長柄小学校
校長 益田孝彦
Tel. 046-875-6860
Fax. 046-876-0682

<http://www.town.hayama.lg.jp/nagae>



◆◆ ユニセフ募金へのご協力ありがとうございます。 ◆◆

先週の朝の昇降口では、募金を呼びかける児童の声が聞こえる活気のある長柄小学校の様子が見られました。児童会のみんなの頑張りが伝わってきます。そして驚きとともに大変ありがたい感謝申し上げるのが、子どもたちの募金総額です。

担当教員が郵便局に向かった結果、総額¥56,755にのびりました。教師も見守っていますが、子どもたちの力だけで運営していたので、こんなに集まるものとは考えていませんでした。正直すごいなと思いました。ご協力いただきましたご家庭の皆さんに、そして企画から実施まで頑張った児童の皆さんに改めて感謝申し上げます。

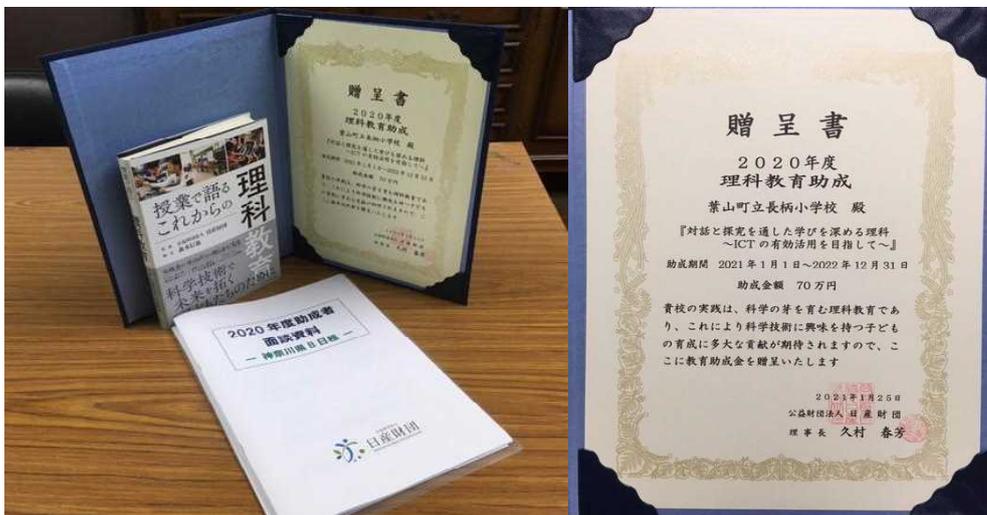
◆◆ 二人の学生さんが管理栄養士実習に励んでいます。 ◆◆



管理栄養士を目指して、二人の学生さんが実習を頑張っています。

18日(木)には、指導されている大学の講師も見え、二人の頑張っている授業の様子を見て行かれました。左の さんは、「お米のお話」右の さんは「小麦粉のお話」を1年生のみんなにしていました。期間は1週間と短い実習ですが、全力で取り組んでくれました。

◆◆ 日産財団からの理科教育助成のご支援をいただくことが決まりました。 ◆◆



2021年1月～2022年12月までの2年間総額70万円のご支援を受け、理科教育について研究を進めていきます。クロームブッカー一台配付に備え、その有効活用も含め、理科の授業が楽しくなるような研究を進めていきたいと考えています。理科専科の先生方も、児童のために頑張ってくれようとしています。研究を通して、ICTの有効活用について、他の先生方の助けになるよう工夫していくつもりです。助成が活かせるよう頑張っていきたいと思っております。

◆◆ 学校関係者評価委員会を終えて、一番考えていることが、地域への貢献のあり方です。 ◆◆

コミュニティ・スクール化を目指すとき、「地域が学校の応援団になる」という、学校側のメリットを考えがちですが、「学校が地域の応援団になる」という視点をしっかり持つことが大切です。地域に支えられた学校を長く続けていくには、WIN-WIN(ウィンウィン:双方が利益を得る)の関係である必要があると考えます。

だからこそ学校に何が出来るだろうと考えているのです。身近な例から始めれば、児童ができることとして、「あいさつが明るくかわされる町づくり」という、昔ながらのようにも思える行為が頭に浮かびます。

長柄小学校の児童は基本的にとっても良い児童です。でも、あえて言えば、あいさつをよくする児童集団ではないような気がします。業務員さんが横断歩道の安全を守ってくださっているとき、「おはようございます。」と声を出してあいさつしていく児童が少ないのです。地域で活躍くださる、スクールサポーターの方々へのあいさつはどうなんだろうと心配になります。簡単なことのように難しいとしたら、まず取り組むべきところは、この辺からかなと思ったりしています。

◆◆ この1週間は、色々ありました。 ◆◆

一つ目は、10年が経ったことを吹き飛ばしてしまったような、東北を襲った震度6強の地震です。

自宅にいて揺れを感じたとき、その揺れの強さと揺れの時間の長さから、大きな地震が起こったことは分かりました。地震速報で場所が東北地方（福島県・宮城県）付近と知って、大変心が痛みました。復興を期して大きな試練を乗り越えて頑張っている東北の人々に、10年経って「まだ終わっていないよ」とばかりの、つらいメッセージというか試練が課せられたようで、どうしようもないことだけに心が痛んだのです。東北に親族がおられる方も同じように感じられたのではないのでしょうか。

一つ気がついたことは、昭和53年宮城県沖地震で、ブロック塀が数多く倒壊し、人的被害も出たことから、支柱の入っていないブロック塀の撤去が対策としてとられてきたはずなのですが、今回また多くのブロック塀等の倒壊した映像が入ってきました。大阪地震でも小学生が被害に遭うなど、大地震の際は塀が凶器に変わることは少なくありません。今回、非常事態宣言下の夜11時台と言うこともあって、夜道を歩いている人がほとんどいなかったことが人的被害を大きく減らしてくれたようです。この葉山町が大きな地震を経験する可能性も残念ながら十分あります。日本に住んでいる以上、それは宿命だと思えます。対策を積極的に進めてきた県でも、まだまだ倒壊する塀はあるのだと心に留め、いざというときに近寄らない実践につなげていきたいものです。



二つ目は、月曜日の豪雨です。幸い、児童の下校時には小康状態になり、安全に下校を完了しましたが、私自身が町内を視察した時点では、排水口から雨水が吹き出していたり、路面を川のように水が流れ、冠水した交差点などがいくつかあり、若宮陶器付近の森戸川（仲町橋）では、流水の作る音がごうごうと聞こえていました。予報では、やがて収まることが分かっていたはずでしたが、下校時点での状況は読み切れず、安全な下校措置をとる判断に至りました。

三つ目は、水曜日の暴風です。日本中を強風が襲っていることは分かっていたのですが、1時半の時点で職員集合して対策を練っている最中、風は強そうに感じるが、明るい日差しの中、砂ぼこりもたたない校庭を見ながらの判断では、「一斉下校は必要ない。」といった結論に至りました。そして、1・2年生の下校時各地点で立ち、下校を見守る。3年生以上の下校の際には、各下校コースごとに押し出すように一緒に下校して安全を見届ける、という対策をとることになりました。

対策を検討する際に、「風速の基準のない中、毎回一斉下校をとるような措置をとっていると、その回数は思った以上に多くなる」ことが、課題になりました。風速基準を設けるのも、tenki.jp や、ウェザーニュース、Yahoo! 等予測が各社バラバラなことも難しさに拍車をかけます。山陰の風の弱いところに住む保護者の方の印象と、台地の上に立つ家や、「風早」と地名にも名を残す地域の保護者の方でも、学校の判断は大げさと思われたり、学校の判断は当然と思われたりと、それぞれ印象が異なることも判断の難しさに繋がります。

実際、各地点に立った先生方からは、「風が職員室で感じていた以上に強かった。見守りをして良かった。」との報告を受け取りました。職員室から見る校庭の風景が穏やかに感じていたのは、たつ砂ぼこりがすでにすべて吹き飛んで、校庭が砂で白むことがなかったからの見慣れない風景だったからのようです。毎回授業短縮・一斉下校といった安全措置はとれませんが、状況をよく判断して適切な対応を心がけていきたいと思えます。それにしても自然の脅威を強く感じるこの1週間でした。

◆◆ 3年生が町の安全（交通標識等）の確認実習に行ってきました。 ◆◆



クラスごとに、日程を変えて、長柄町内の交通標識など、安全に関わる標識や看板などどんなものがあるのか、写真のようなプリントを持って確認に行っています。安全に登下校等を行うことは、結果的には町に大きく貢献することに繋がります。事故を起こしたいドライバーなどいないからです。安全意識の向上は、長柄地区に住む地域の皆さんを大切にすることに繋がるのだと子どもたちに気づいてほしいと願います。